

## 第2回九鬼周造記念講演会 シンポジウム「偶然に響く言葉の行方」二〇二一年三月四日 於・ZOOMによるオンライン開催

著者	串田 純一, 浦井 聡, 川口 茂雄
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	23
ページ	一〇八-一二〇
発行年	2022-03-20
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00004123">http://doi.org/10.14990/00004123</a>

(4) 上掲書、二一五頁。

## 第2回九鬼周造記念講演会

シンポジウム「偶然に響く言葉の行方」

二〇二一年三月四日

於・Zoomによるオンライン開催

○司会 時間になりましたので、第2回の九鬼周造記念講演会を、開始したいと存じます。司会の甲南大学文学部の川口と申します。今年度は、串田純一先生にお越しいただきまして、ご講演をいただけることになりました。そしてコメントーターには浦井聡先生がお越しくださっています。

皆さまご存じのように、実際に人があつまって、講演会という形でつどい、そして質疑応答のやりとりをするというコミュニケーションをおこなうことは難しい年度に、なりまして。この会も、夏に実施する予定だったものが長らく延期いたしました。なんとか会を実施できないかと模索する途中でも再びいわゆる緊急事態宣言が出るなど、困難が続いております。最終的に、このようなオンラインの形で、今日、無

事実施をできる運びとなりました。

オンラインであることにはメリットもあり、各地の様々なところからご来聴いただいておりますようで、その面ではよかったかなと存じます。今日はご講演、そしてコメントーターからのコメントの後に、フロアの皆さまからご質問をいただきまして、登壇者と質疑応答する時間を設けておりますので、ぜひ、様々なご発言を頂戴できましたら幸いに存じます。

それではさっそく、串田先生のご講演からプログラムを始めてまいります。タイトルは「偶然に響く言葉の行方——九鬼周造から出発して」です。串田先生はご著書はもろろんのこと、色々な媒体にてご論文、ご文章を書いておられます有名な方ですので、あらためて私からご紹介する必要があります。くないほどであります。ご講演のファイル（来聴者に配布）の最初にご自身の簡単なご紹介を記しておられますので、こちらも皆さまご参照くださればと存じます。

そうしましたら、串田先生から一時間ほどのご講演をいただきます。串田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【串田先生の講演内容は八七ページに掲載】

○司会 串田先生、どうもありがとうございました。

ハイデガーと手塚ないし九鬼との対話のお話からはじまって、そこから日本の和歌について、とりわけ万葉集についてのお話を重ねつつ、九鬼の『偶然性の問題』や『いき』の構造』、それから押韻の問題について、大変幅広い教養にもとづいた、興味深いお話をいただけたと思います。

歌と、歌物語というパレルゴンについてのご指摘がありました。また最後には、この和歌というものと、それが途中で権威化や形式化などがあって衰退してきたけれども、では現代において事態はどうなっているのか、という問い。現代では、いわゆるインターネットやSNSによって、公的な次元と私的な次元が混ざってきているのか、それとも、あまりにもプライベートシーの次元が不透明化して、公と私に分断されているのかという、非常に大きな問題が、ここにはあるのだと思われまます。

和歌というものが、あるいは九鬼の言う「いき」が、あるいは他の時代において「みやび」と言われていたようなものが、きわめてプライベートな空間で、何かの偶然によって本当にわずかに起こるようなものでありつつ、和歌や歌物語という作品の形で公的な場に残っていくということであるとか、そうした芸術であるとか言葉というものの核心にまで言及がおよんでいくような、大変エキサイティングなご講演で、

とても興奮しておうかがいさせていただきました。ありがとうございます。

さて、ここから、5分ほど休憩といたします。続いて、串田先生のご講演に対する浦井先生からのコメントをおうかがいしまして、そのちに、串田先生によるリプライ、そして参加者の皆様との質疑応答という順番に進めてまいります。思います。

(休憩)

本日講演会の、後半に入っております。まずは串田先生の講演に対するコメントを、本日のコメントーターの、大谷ファイルにつきましても、先ほど参加者の皆さまにはメールを通じてファイルをお送りしておりますし、またZoomの画面共有のほうでも、ご覧いただくことができます。それでは浦井先生、よろしくお願いいたします。

【浦井先生のコメントは一〇三ページに掲載】

○司会 浦井先生、どうもありがとうございました。

コメントの前半で、串田先生の濃密な講演を解きほぐして分かりやすく概要を振り返ってくださると同時に、コメントの後半では、物語と現代の状況などについて、ご質問を提

起されたものだと思います。

ではまずはこの浦井先生からのコメントに、串田先生から何らかのリプライをいただきまして、そこから、フロアの皆さんとの質疑応答に移りたく存じます。では串田先生、よろしくお願いたします。

○串田 それこそ、言えること、言わないといけないこと、考えることは山ほどあるわけですけど、まさに歌というものの機能の重要な一つに、やはり共同体同士とか共同体の内部における、物語的規範の問題があります。

だから、物語というのは、やはり当然、両面があるといえますか、もろ刃の剣であって、一方では非常にかけ離れた文脈を大きな枠組みとして包摂して、かけ離れたものを結びつける、つなぐことができる、より大きな枠組みをつくることのできるという面と、逆に、誰もがアクセスできて、それなりに読めちゃうという、アクセスのしやすさが、逆に人々を均等化して、規範化して、一種の重荷、かせになるということですか、枠になる。そういう両面が、当然、物語にはあって、この物語の両面性と、まさに詩歌というものの機能が、そこにさらに複雑に差し込まれていくことになるわけですね。まさに、その異なる物語、異なる規範とか、あるいは物語内部での、規範的な物語と、それにうまく収まり切らない個人との緊張関係みたいなところ。そこにおいて歌がしばしば

生まれるんだと。あるいはそれを、その緊張関係を和らげることもその歌の最も重要な機能だということも言えるわけですね。それこそ古今集仮名序にある、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」というわけですね。

ですから、争いの起こるところで歌の機能というものが発揮されてきた。まさにそのあり方を伝えるのが歌物語だったります。だから、歌物語というのは一種の弁証法のなかにあるわけですね。すでに共有された物語というものがあって、そこには収まらないところに歌が生じる。その収まらなかった歌が、結局、もう一度新しい物語をいかに形成していくのかという、そういう運動なんですね。その頂点が、やはり、何といっても伊勢物語の「狩りの使ひ」の段なんですけど、それは置いておきましょう。

そういうところがあって、ですから、その新しい現代的なシステムにおいて、物語間の齟齬そごみたいなものに対する身の処し方みたいなもののモデルが、まさにあってしかるべきかどうか、あったらいいと思うのに、それを記録したりすることが社会システム上難しくなっている。それこそブライヴァシーとか著作権の問題とかがあってということですね。

ちょっと蛇足というか、雑談っぽくなりますけど、そういう

現代の伊勢物語みたいなものの可能性がどういふふうなのかということをいろいろ考えて、具体的なものとかもいろいろ探してゐるんですけど。例えば一つ興味深いのに、ねじめ正一が書いた本に『荒地の恋』というのがあって、これは戦後詩を代表する田村隆一と北村太郎とか、いわゆる荒地派の詩人ですね、鮎川信夫も含めて。この田村の奥さんと北村が不倫をするという、それは事実だったようですけども、それを題材にした物語なんですね。有名詩人は全員実名で出てきて、女性も仮名で出てくるという非常に微妙な作りになっていて、

これが、じゃあ歌物語になってるかという、詩はほとんど出てきません。詩人というのは一つの主人公の属性とか、社会的な背景に過ぎなくて、詩的言語そのものの可能性が、ここで新しく何か提示されてるわけではなくて、それは伝統的な歌物語とはやはり違うわけですね。このあたりも、やはり現代社会の一つの限界なのかなと。ねじめが、この北村とか田村とかの肖像権の問題とか、どういふふうに扱って、問題が起こったのか、解決したのか、出版社は文藝春秋ですけど、何かあったのか、そのへんも興味がありますけども。いずれにしても、ですから、物語というのはつねに両面があって、その弁証法的運動に詩歌というのしかかわっているはずだと。まさにそのあり方を、詳しく現代的状況に適応させるための条件が必ずしも整ってないというのが僕の考えですね。

ここにはまた、田辺が言っている公案的状况というのとも非常にかかわってくる。公案というのはまさに言語化されてしかるべきであって。田辺の言う公案的状况というのは、共同体の要求と、それと相容れない私的な要求が、一人の個人に押し加かかってくるといったもので、それは一種の偶然性でもあるわけですね。その公案的状况に言語的表現を与えると、おのずから詩的なものになる。実際、公案って詩とほとんど区別がつかないようなところがありますよね。という感じですね。

○司会 浦井先生、いま何か言いますか。どうでしょう。

○浦井 時間があると思うので、フロアのほうに。

○司会 わかりました。また何か関連する問い、話題などがフロアの皆さまから出ましたら、そのときにご発言をお願いいたします。

それでは、いまのこのままの流れで、フロアの皆さまから串田先生のご講演に、どのような角度からでも、あるいは浦井先生からのコメントに関連してでも、ご質問を承りたいと思います。Zoomの挙手機能、手を挙げるというのがあるのですけれども、それをご活用いただきまして、ご発言くださいと私のほうから申し上げますので、Zoomの手を挙げる機能で挙手いただければと思います。よろしくお願いいたします。

では、——さん、音声でご質問いただければと思います。どうぞご発言よろしく願います。

○質問者A はい、よろしく願います。声は聞こえていますでしょうか。

○司会 はい、聞こえております。

○質問者A ありがとうございます。——といいます。いま——大学教育学部の4回生です。二点ほど、質問と感想を言いたいのですが。まず一点目、串田先生へのご質問で、資料がいいですと6ページのところで。

ご講演全体にもかわると思うのですが、「またとない瞬間」ということで、それが九鬼とハイデガーとの重なる点であるとして串田先生は提示されていると思うんですけども、九鬼の場合ですと、瞬間性といいますか、一回性とか単独性ということだけではなくて、その裏面ともいえる永遠性との結合、永遠の今と九鬼が呼んでいるものが九鬼のなかでは問題になっていて、それがハイデガーだとどうなのか。これは私は詳しく知りませんので、ぜひ教えていただきたいと思えます。

それらを重ね合わせて、「またとない瞬間」と言うときに、九鬼は、ハイデガーの本来の実存と同じことを本当に意味していたのか。私はむしろ、永遠の今というほうに九鬼は関心があったように思っています。「偶然性の問題」のなかで、

九鬼が回来的偶然ということを言うときにも、この駄じゃれだったり韻だったりのことに触れていると思うんですが、そういう、言葉が何回も繰り返されるということが、むしろ偶然から必然へと向かう動きを持っているということ。それが永遠の今というもので、永遠性、必然性を有するというところに九鬼が関心を抱いていた点について、いかがお考えかをおたずねしたいと思います。

二点目は感想になります。これは1点目の質問と重なるようになるんですが、偶然が重なって必然になるということは、物語という、ご講演と浦井先生からのコメントに、両方に出てきた言葉と重なってくるかなと思います。そこで、俗っぽい例なんですけど、最近陰謀論といわれることについても思いますが、そういう本来偶然でしかない、あまり因果関係がないことが、重なっていくと、ある人にとっては非常に強い因果性をもって、必然性をもって、強烈な物語として働いてしまうということが、往々にしてあります。それがTwitterなどで拡散されてシェアされていくと、それが一つの共同体の基盤として機能してしまうということは、浦井先生が指摘されたことと重なってくる点だと思います。

そのなかで、やはり重要になってくるのは、何が正しいのかという問題もあると思うんですが、事実に基づいてきちんと考えている人と、そういうふうに関違った方向で推測を

してしまおう人との間でのコミュニケーションというものが、私たちの現代の社会的な状況にとっては非常に重要なのかと思います。

浦井先生のコメントの最後に出てきました、異他的なもの、他なるものとの出会いのなかでの驚きという点への九鬼の注目が、私は重要なかと思っています。教育学部で卒論を九鬼について書いたんですけども、そういう面で、驚きという情緒を教育のなかで、もっと自己否定的な経験として考えたらどうなるかということを考えています。

他なるものとの出会いのなかからこそ歌が生まれる、詩が生まれるんじゃないかという、その串田先生のご発言に見られるように、他なるものと出会った驚きとか衝撃みたいなところから、自己の言葉、新たな言葉、詩的言語と言っているのかわからないですが、そういうものを語り出す衝動が生まれるところに、何か子どものひらめきがあるのかなと、私なんかは思うところがあります。

そこで重ねて考えられるのは、たとえば日本での作文教育、生活綴<sup>つづりかた</sup>方運動というのが戦前、戦中にあつたので、そうしたものが、教育という形では、先ほど言われた他なるものとの出会いから出てくるひらめきみたいなものをつかみ取る言葉の形式の一つなのかなと思います。ただし、教育学のなかでは、生活綴方が、一方では子どもの自由ということを前面

に押し出しながらも、裏面では思想善導の道具だったという指摘もあるので、そこはやはり表裏一体というか、新たな共同体の基盤となる新しい言葉を生むツールにもなりうるし、また逆に、そうした強固な、危険な物語を提供してしまうという可能性もあると思うんですが、そういう二面性のなかで、このようなツールは考えられるべきだろうと改めて思いました。大変興味深いご講演とコメント、ありがとうございます。以上です。

○司会 ——さん、どうもありがとうございます。串田先生のご講演と浦井先生のコメントとに、非常にまんべんなくかわる、興味深いご質問を頂けたと思います。

○串田 ハイデガーにかんしては、ちょっと踏み込んだ話になりますけど、やはり永遠性ということが非常に使いにくい立場というか、状況にあつた。つまり、あまりにもキリスト教に結びつくからですね。永遠という言葉は神の属性になる。

対して、九鬼はそれがなくて、やや素朴に、東洋的な永遠的時間ということが言える。ですから彼は、ハイデガーほど縛りがなく、それが言えるということがあって。実質的には、ハイデガーにも永遠性はあると思いますけども、ただし、それは歴史というものに媒介されるわけですね、ハイデガーの場合。

九鬼はこの歴史という観点にかんして、やや素朴かなと思うこともある。たとえば江戸期の前近代の「いき」というものに、わりと素直にアクセスしている。これは九鬼自身の、非常に貴族的な資質がそれを可能にしているというところもあるんですけども、近代というものの特殊性に、特異性に、ほかの京都学派の人とかと比べても、ほとんど頓着しないようなところがありますね。むしろ、過去に非常に直通できる人である。

ですから、この歴史性というものがやや出てこなくて、ハイドガーの場合は、永遠というの是一种の普遍なものではなくて、また繰り返し返すものでもなくて、古代ギリシャから始まる形而上学を軸に、その前とその後という大きな三つのピリオドがあるわけですね、エポックが。歴史性の恐ろしいところは、歴史という概念自体が歴史的に変化していくというようなことがたとえばあったりする。そういう変化をとらえることすら容易ではないような歴史性。

しかし、それを通じて何かとどまるものがあるわけですね。まさに、それは言語だったりするわけですけども。その、まさにパルメニデスの言葉みたいなものが、なぜか記号として、痕跡として残って、それがそれぞれの歴史的状况においてまったく違う可能性を次々に展開しつつ、組み尽くせない可能性をつねに隠し続けるみたいなのところがあって。ハイデ

ガーにおける永遠という層があるとしたら、そういうところ。そういう意味では、やはり永遠が言葉に宿るという点では、たぶん、九鬼とも通じるところがあるかなと思います。ということですね。ただ、歴史性というところに、大きな枠、一つの分かれ目があるとは思いますが。

○司会 串田先生、ひとまずそんなところですか。

○串田 そうですね。ですから、それは子どもの教育という点にかんして難しいのは、歴史性というものに触れるのは、やはりある程度大人になってからなんです。子供の教育というのは、そのための準備だと。でも私は、歴史性の感覚のよなもの小さい頃からあった方が良いと思っています。あまりにも現代の社会とかシステムにフィットさせるような教育をすると、まさに、その歴史的な変動というものに開かれるスタンスがそがれてしまうというか、ふさがれてしまうところがあって。

まさに子どもというのは、だから難しいですね。子どもがさらされる歴史的状况というものが歴史的に変化するというところもあって、現代の子どもたちがどうなのか。私の世代なんかは、たとえば冷戦が終わる頃がちょうど中学高校の境目にあたりして、やはり一種の歴史性というものをある程度身に浴びる。成長の過程で日本がどんどん凋落ちようらくしているのを見ていて、まさに教育・成長と歴史性が重なるよう

なところもあつたりする。いずれにしても、子どもと歴史という問題は、たぶん教育学においてあまり言われないことですけれども、非常に重要ななと思いますね。

○質問者 A ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。そうしたら、浦井さんからもぜひよろしく願います。

○浦井 陰謀論の話、興味深く拝聴しました。事実ベースと陰謀論とが対立するという話がありました、「事実」という問題にかんしては、そもそも事実ベースで考えていると言う人が「事実」を知りえているかという、非常に大きな問題があると思います。

これは、実は、田辺哲学の根幹にかかわる問題です。田辺は西田の純粹経験を唯一の實在とする立場に立って哲学者としてのキャリアをスタートさせました。一方で、フッサールのいわゆる「事象そのものへ！」(Zu den Sachen selbst)という理念にも共感しています。それで、純粹経験において實在を把握するという立場を、フッサールの「事象そのものへ！」に接続します。この「事象」(Sachen)をふまえて田辺は *Sachlichkeit* という概念を使いはじめます。この概念は、田辺がドイツ留学中に受講したハイデガーの一九三三年の講義『オントロギー——事実性の解釈学』での「事実性」(*Factizität*)と深くつながっています。それで、フッサールやハ

イデガーの現象学が問題にしている事実性、あるいは事象そのものには、弁証法じゃないとたどり着けないという立場に田辺は立ちます。そして、現象学と西田幾多郎の哲学と、そして弁証法をひとまとめにした絶対弁証法という立場を一九三〇年に提示します。ですが結局、「種の論理」の最後まで行って、私たちは自分の力では事実にはたどり着けないということに田辺は気づきます。

だから、ここでまさに偶然性が問題となってきます。つまり、自分の外側から偶然に事実そのものが現れる瞬間が問題になってきます。そして、これは絶対者の問題と重なります。つまり、事実は絶対者から教えられるものであって、自分の力ではたどり着けないということを田辺は宗教哲学において語り始めます。

このことをふまえると、いかに事実ベースで考えていると言っても、それ自身が〈事実ベースで考えている〉という物語なのではないでしょうか。事実ベースで考えていると言う人たちは本当に事実が分かっているのか、ということをお考えください。

○司会 ありがとうございます。この広義の物語とか事実とか全般にかんしてと、先の陰謀論というような個別の話題にかんしてと、両方の角度からお話をうかがえたかと思えます。少し別の角度ですけれども、確かに九鬼の「いき」という

ものには、現実に対して距離を取るといふようなところがあって、超然と距離を取るみたいなのを言っているところがあります。

これが、理想主義というものでもあると九鬼は一面で言うわけですが、ただしそこには、反権威的な現状打破的な側面と、何かちょっと諦めのような——諦めというのも非常に繊細に理解しなきゃいけないですけれども——現状維持的な側面との、両面があります。この二面性にはなかなか、串田先生流に言うところ「會得」すべき、深く理解すべき様々なニュアンスが存しているには思います。スローターダイクだと〈シニカル〉と〈キニカル〉との区別みたいな図式で言うわけですが、現状維持的な〈シニカル〉ということだけが必ずしも九鬼の「いき」というものではなからうと、思います。

ちょっといまのは私が勝手に述べまして、話がそれましたね。どうも、——さん、よい質問を大変ありがとうございます。

それでは、続けてほかの方のご質問をうかがえればと思います。ご質問のあります方は、手を挙げる機能で挙手を頂けましたらと存じます。お願いします。そうしましたら、——さん、ぜひお願いいたします。

○質問者B 偶然と必然の問題というのが先ほどから出てきて

いて、それで、私はあまり九鬼とかには明るくないんですけども、アリストテレスは『詩学』のなかで、偶然的に起こった出来事があったかも必然的に起こったかのようにミュートスが組まれているときに、最も哀れみとかを催すと、言っていたと思うんですよね。たとえば殺人犯がいたら、偶然象が倒れてきて死ぬんだけど、それがあつたかも報いであるかのように見える。こういう出来事が人を動かすんだ、と言っている。

これは私、けっこう印象に残っていて、文芸にかんするかなり強力な図式だなと思うのです。何か漠然とした質問なんですけれども、こういう見方は、もしかしたら串田さんとかの文学観とは相容れないのかもしれないですけど、どうでしょうか。ハイデガーからでも、九鬼からでもいいですけど、こうしたアリストテレス的な見立てに対して応答しようとする、どんな感じになるでしょうか。

○串田 やはり偶然性に必然性をもたらすのは、そのつどの行為の機知というんですかね、エスプリ。とりわけ、やはり言語表現なんです。つまり、恋愛なんというのはよくあることで、ある意味凡庸なことだと。でも、それが伊勢物語なんかではなぜ卓越しているのかというのと、つねに、といつても、それぞれの人間がそれぞれ固有の文脈とか可能性とか限界とかをもっていて、それが出会おうわけですよ。それが偶然に

見えるんだけど、その偶然を一般的な言葉で語らないといけない。

だからつまり、偶然性というのはある種の一般性のもとで生じるんですね。離接的偶然というのは、言語が一般性を持っているからこそ、たとえば電車のなかで、誰か、電車に乗るといときは、非常に一般性が高いですね。何時何分のどの電車に、何号車に乗るかという細かい規定がなくて、言語というのは一般性を持つてるから、その言語が描写しうる個々の出来事というのはつねに複数あるわけですね。ですの、通常の言語を用いている限りは、その数ある出来事のうちの一つに自分がたまたま陥ったとしても、それは偶然にか見えない。

それがある種の必然性に転換するのは、この状況はその言葉によってしか表現できないという表現一つの出来事に対して見つけることによって、偶然が一種の必然に転換するというんですかね。そういうことが言えると思う。まさに歌というのはそういう手段なんですね。その有力な手法だったのが、特に王朝期なんかでは掛け言葉とか序詞じょごであった。

つまり、一般的な出会いの場所とか季節とか、その場に合ったものですね。タチバナの花だったりとか、相手の着ているものとか。そういう偶然性をとらえて、一般性に、一般的な言語に固有の表現を与えていく。それによって偶然を必

然性として受け入れる、偶然の運命を必然性へと引き受けていく。そういう方が実にみやびだということで、伊勢物語というのは一二〇〇年間日本文芸の一つの頂点であり続けているというのが、私の大ざっぱな見方ですね。

○質問者B ありがとうございます。

○串田 で、その頂点が「狩りの使ひ」の段で、ここには、「君やこし我や行きむおもほえず夢か現か寝てかさめてか」という、音韻的にもほとんど完璧な、日本詩の最高峰の一つだと思えますけれど、そういうのが出てきたりしてるわけですね。この段については、いずれきちんと分析して書かないといけないですけども。とにかくそういうことです。

○司会 ありがとうございます。

言葉というのは、単語のレベルでは〈一般〉的なもの、形式的で空虚なものにすぎないですけども、それが偶然の出来事という〈個別〉に対して、言葉の組み合わせとか、短くても物語性とか、あるいは音が韻を踏んでいるというようなことにおいて、それが〈特殊〉として何か〈個別〉に的中する言葉の作品になるというような、浦井先生のご指摘などともつながる論点が、また見えたかと思えます。

そろそろ時間も迫ってきましたが、では私からも一つ、ご質問申し上げたいです。

先ほど、ご質問にもありましたし、講演者からのご返答に

もありましたけれども、確かに九鬼は過去の時代に直通する人であるというか、歴史についてダイレクトには語らないんだけれども、でも何か考えているというようないや、そういう九鬼の特徴みたいなことのお話がありました。串田先生に、もし何かアイデアがあったらおうかがいしたいのは、もちろん和歌というもので、奈良時代、平安時代などにも九鬼の考えというのは通じていくと思うんですけども、他方で一つの特徴として、九鬼の江戸時代重視みたいなものを感じるわけですよ、私たちから見て。それがやや、京都学派というのか、このくくりもいろいろ曖昧ですけども、そのなかでもやや目立っているような感じがしております。

そして実際、私たち、現代のジャパンのカルチャーに生きているのであろう世代の人間からすると、不思議なことに江戸時代というのは、比較的近いはずの時代でありながら、なぜか平安時代など以上にとらえにくいところもあります。そのなかで、江戸時代への九鬼の意識といえますか、九鬼のまなざしは、興味深いと思うんですけども、そのあたりの事柄について、もし串田先生から何かお考えを、おうかがいできたならうれしく思います。

○串田 そうですね。なかなか九鬼は、確かにおっしゃるとおりだと思うんです。まずは東京育ちで、特に戦前の間は、東京は、やはり江戸との連続性が思ってる以上に強いとしばし

ば最近言われるようなことで、それも、だから、江戸時代以来の、例えば三味線のお師匠さんがずっと、師匠の師匠、二代遡ればもう江戸時代みたいな人たちがいた空間ですから、当然そうなるだろうなということ。京都とかへの一種の対抗心みたいなものもあったかもしれないですけども。

ただ、九鬼の資質からして、やはり江戸とともに、たぶん、平安時代というか中古時代にもたぶん、比較的なじむはずだったと思うんです。それはたぶん、時代の問題もあって。

つまり、近代、明治以降は万葉重視、古今軽視の風潮が主流で、非常に顕著なわけですね。九鬼自身も万葉集とかのほうを参照している回数が多いような気がします。彼ほどの教養のわりには、王朝、源氏物語にはほとんど触れないです。たとえば、ということがあることがあって、それは本人の資質との間にちょっと齟齬があるという気はしますね。明らかに万葉的な〈ますらおぶり〉よりも、平安的な〈たおやめぶり〉のほうが彼に似合っていると思うんですけども、そこを補うというのも、研究の一つの方法かなという気もしますね。

○司会 本当に、今日のご講演でも、単に九鬼が書いたものを見てその範囲内でということにとどまるのではなくて、串田先生は、九鬼の資質からすればこのテキストとか、この時代のこういう作品に言及しておかしくない、むしろそのほうが合っているのになぜかそうではないかと、なぜ九鬼

はみやびという言葉とか概念に触れてないのか、むしろ不思議である。というような、まさにそうした次元にまで深く洞察を掘り下げてゆかれるというのが、やはり九鬼研究のなかでも新しい方向性を切り拓いているのではないかと思いついて、大変感銘深くお話をうかがいました。

浦井先生、何か関連して補足ですとか、あるいは串田先生からのリプライに対して何か補足をされますか。

○浦井 さきほど川口先生が言っておられた、歴史の問題に関連してですが、九鬼が『偶然性の問題』を書いた後にも『文芸論』を書いた後にも、自分はやり切った、というようなことを配偶者に言っていたと思います。一方、当時の京都学派のメインテーマのひとつには歴史があり、多くの人たちがこれに言及しているのに、九鬼は歴史論を書かずに悔いなく死んでいった。九鬼のテクストの書き方にしてもそうですが、歴史を論じなかったのは、西田・田辺を中心とする京都学派とは、距離を置きたかったのではないかということをおもいます。

○司会 これもまた非常に重要な話題だと思います。同時代の弟子世代の色々な証言などがあつたりしますし、興味深い話題がさまざまにあるかと思えます。

もう時間も超過しておるのですが、押韻のことに触れておきましょうか。そういえば、韻についてあるとき必要があつ

て私は、ここ二〇年ぐらいのいわゆるJポップの、ポピュラー音楽の歌詞がどういうふうな韻を踏んでいるのかという点について、個人的に少し調べてみたことがあったのですが、それをきょう持ってきて、串田先生にどうぞ分析されるかとおうかがいしてもよかったですかもしれません。

また、歌の歌詞から発想してテレビドラマのシナリオをつくりましたというようなものが、あったような気がします。つまり、それは現代での一種の歌物語というようなものかもしれないかもしれません。しかし実証的にそうしたものの実例をいま、いくつか具体的に挙げる用意はできておりません。

○串田 韻の話で言うと、もう一つ、九鬼が触れていなくて重要な問題があります。

日本語はウラル・アルタイ語族とは最近では言われていないようですけれども、共有する性質に、母音調和というのがありますよね。つまり、単語レベルで同じ母音が続く。「こころ」とか「おおう」とかでですね。他にも「はな」「からだ」、「はは」「ちち」とかもですね。特に「こころ」なんかは典型的に、もう単語レベルで一種の韻律が入っちゃって、これが日本語の韻律においてきわめて重要な気がしているので、す。

なのに、たぶん、言語学的にこれが強調されるようになった時期が遅かったからかはわからないのですけれども、九鬼

がそれにまったく触れていないのが、不思議だなというか、ちょっと物足りないなというとは思いました。すみません、最後にちょっとつけ足しました。

○司会 ありがとうございます。まさに、優れた作詞家というか、現代の歌詞をつくっている人というのは、そういうことを非常に気をつけていると私も思いますので。またこれはこれで、一つのシンポジウムをやらなきゃいけないぐらいの大きな事柄であります。しかしその事柄の研究に向けての、理論的かつ哲学的なベースとすることができるようなのを、今日のご講演で、ご提示いただけたのではなかったかと考えます。

さて、本日のご講演、コメント、それから質疑応答の内容は文字起こしをしまして、人間科学研究所の紀要に掲載し、紀要には紙媒体もありますが、ウェブ上でPDFでもご覧いただける形になる予定でございます。

それでは、大変話題豊富なご講演でありましたが、時間になりましたので、本日の講演会は以上とさせていただきます。時間には思います。参加してくださいました皆様、それから講演者の串田先生、浦井先生、本日はどうも大変ありがとうございます。これで本日の第2回九鬼周造記念講演会を終了させていただきます。

○串田 ありがとうございます。